

2022年12月

課題本 『首里の馬』

高山羽根子/著 新潮社 2020年

◆◆◆12月の読書会から

「よくわからない。」「難しい。」今回の課題本『首里の馬』の読書会はこんな言葉が聞かれる中で始まりました。芥川賞受賞の作品ですからそんなに長くない(160 ページ)本です。それぞれが作品から感じ取った「知識」「情報」「記憶」等々の言葉から深堀をしていきました。

今回の感想文は、読書会メンバーのそれぞれの立ち位置から書かれていて、読み応えがあります。まさに「読み」「語り」「書く」という読書会の妙味が溢れています。例えばピンポイントの置き方も読み手それぞれです。自分の経験と重ね合わせることもそれぞれです。これぞ読書会です。作者自身、三人に送る資料も三人それぞれの記憶のあり方を認めています。

火災にあった首里城が元の姿に戻ったのも多くの資料(情報, 記憶, 知識)があったからです。作者が本作品を書き始めてからまた火災がありました。「首里を含んだ沖縄」と広くとらえて考えたり、「首里」とピンポイントで考えたりと、いろいろな立ち位置から作品を読んでいきました。(文責: 世話係)

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

小説は、最後まで読まなければ解らないのは当然のことですが、題名を見てから読み始めるので、題名のイメージが文中に現れることも当然のことと期待します。

『首里の馬』の「首里」は沖縄県の地名。あの海辺か、戦跡が舞台になるのかなと訪ねたことのある景色を思い浮かべながら読み進めました。

ところが問題は、次の言葉の「馬」です。

読んでも読んでも「馬」が出てきません。「馬」が登場するのは 64 ページで、全 158 ページの作品の半ばあたりです。それも最初は「馬」であることがよくわかりません。

「馬が出たあ」と、やっと期待に込めてもらうにも 10 ページ近くかかります。「馬」を探しながらの前半は何を読んだのかと、目印を見失った山岳トレイルの走者になった気分でした。

だから、もう一度、初めから読み直しです。今度は、「馬」探しはしなくていい。

いずれ「馬」は出てくると安心して読むので、登場人物の周りがよく見えます。

文章は、一文が長めで、速い流れとまだるっこい説明が混じりますが、念入りな表現は、全体を粘液質タイプの作風と感じさせました。

その中で、すっきりと流れていくのが、通信を利用して日本語による質問と回答で成り立つ正式名『孤独な業務従事者への定期的な通信による精神的ケアと知性の共有』というオペレーションの部分です。なぞなぞ遊びのようですが、一般的に、対話によって自分をほぐ

す効用のある心理療法を想像しました。

決められた相手に謎解きの提供をし、加えて雑談をするというオペレーターを仕事にしているのが主人公の未名子です。本人が妙な仕事だと言うように、読み手にも現実味のある設定とは感じられない妙な展開です。

未名子は中学、高校ともに学校になじめなかったようで、対人関係を巧みに維持できるタイプではなさそうなのですが、このオペレーションは、淀みなく進みます。

それどころか、離職するまでに、3人の対話相手について読者に素性を明らかにしてしまうほど滑らかな対応です。

オペレーションの相手となった3人は、祖国に居場所がなくどこに居ても危険なら宇宙が美しく安全だという宇宙ステーションに1人住むヴァンダ、東欧系女性で大量のデータのみと1人暮らす極地の深海の住人ポーラ、生き物に囲まれた大草原を離れ戦地の真ん中で精密で安全なシェルターに人質として1人暮らすギバノ。

この3人のそれぞれの住処は、いずれも生命に直接的危険は無いと書かれています。共通しているのは、今、閉塞空間に1人で暮らしていること。

この3カ所の設定は、別々の事情と別々の成り行きでそうなったと納得させるのですが、実は、場所の特性に意味があるわけでは無く、どこであっても一人きりで居れば登場人物になれたらと思うと思います。実際にはオペレーターの未名子と繋いでくれる外部組織があるわけで、厳密にいうと、“見かけ1人”の状態のはずです。「孤独」の定義の見直しを読者にちらつかせているのかもしれない。そして、3人の後ろに蠢く諍いの暗い影。その影が3人の身の上話で濃くなってきたとき、はっと気が付きました。この本の題は「沖縄県の馬」ではなく「首里の馬」であったと。

〈首里はレイテ、硫黄島にならぶ太平洋戦争の激戦地〉と記されています。

「首里」という地名を見ると、15世紀半ば琉球王国が成立し、首里城が姿を整えていく事や、17世紀の初頭に九州島津藩からの侵入を受け、以後次第に琉球王国が日本に組み込まれ、明治時代の廃藩置県（「琉球処分」という言葉は何なのか）で、ついに王国の崩壊を見る事になった歴史が思われます。首里城には、琉球の歴史や文化を背負う王様が居られた。

この王国の人々が独立を保っていたらどうなっているだろうかと想像したり、第2次世界大戦の最後の砦にならなかったかもしれないと、歴史に「モシタラ」はないと知りつつも考えてしまう地名なのです。作品途中から出てくる「馬」が、「宮古馬」であることも、琉球王国をしのばせます。現在は、「宮古馬」を日本在来種と言いますが、地の人のこの馬の扱い方は、右から乗る事など、琉球王国のままだと言われます。「日本在来種」と括ってしまってもよいのかと、ちょっと立ち止まりました。

未名子は、首里にある個人所有の資料館で、10年前の中学生の頃からインデックスカードの整理を手伝ってきました。所有者の郷土史家である順さんは、〈真実の記録なのか偽物なのか、形を変えたものなのか、それを吟味するのはその時代ごとの学者の仕事。収集する者はできる限りの資料を集めることだけ〉という考えの持ち主です。未名子も、もとの風景を取り戻すには、どんな些細なてがかりでも必要だと考えていて、資料館の資料をマイクロSDカードにしてせっせと貯めています。「私の住んでいる島のアーカイブ」を地球上の3カ所に残すことを考えついた未名子は、戦地になって地形まで変わったと言われたこの島の悲劇だ

けではなく、遙か昔からの記憶、情報を残しておく意義を感じていたのだと思いました。

〈事実として記録し続けていけば、やがてどこかで補助線が引かれ関係ない要素どうしであっても思いがけなくつながっていくかもしれない〉という未名子の思いは、データの蓄積を重んじる現代社会の基盤となる考え方です。

老いた順さんの娘の途は、老朽化した資料館を継ぐ気が無いので、ためらいもなく手放すことにしてしまいますが、そうして失われていく生物、文化の 1 つが「馬」であったのかと、作品の結び目の 1 つが見えたように思いました。

300 年の伝統を持ちながら戦前で消えてしまった「琉球競馬」。琉球の各島にその島の地名を名乗る在来種の「馬」がいて、速さでは無く、足並みの美しさを競っていたとか。その中に、昭和初期に名馬として名をはせた「ヒコーキ」が居た。

未名子がふっと口にした迷い馬の名前「ヒコーキ」は、琉球の馬のたどった栄枯盛衰を引き寄せる補助線だったのだと気がついたのです。

それはそのまま人の栄枯盛衰。

沖縄諸島には 3 万年前から人々の営みがあったという事実。「首里」と「馬」が、沖縄という言葉の示す縦軸横軸を、ぐーんと延ばしてくれました。

でも、作品の全体構成は、私の掌では指の間からあふれてしまいます。

『首里の馬』を読んで

◆【 YA 】

高山羽根子さんの作品は初めて、手にする。題名『首里の馬』を見て、読む前にこの本の内容はこうなんだろうと想像してみた。沖縄の長い歴史、琉球王朝と呼ばれていた華やかな文化、第二次大戦の悲惨な状況、そして本土復帰してからの沖縄の現在の置かれた姿、沖縄にまつわる数多くのことが、沖縄古来の馬宮古馬の眼を通して静かに、しかし強く語られているのだろうと描いていた。

人付き合いが苦手な未名子は中学生の頃から高齢の女性順さんの所有する沖縄の歴史が詰め込まれた資料館の整理を手伝っていた。大人になっても足繁く通い、順さんの姿に共感を覚える。見せる為ではなく、膨大な資料を個人で収集する順さんの歴史を残さねばと、思うようになる。一方未名子は遠く離れた世界の人達とオンラインでクイズ問答をするという現在しか出来ないことを仕事としている。画面上で対面する人達もやはり自分に対してこだわりが有るのだろうと推測出来る。今は世界の何処でもすぐに繋がりができ、その意味では、一人では無いのだと認識出来る。世界は狭くなっている。未名子も彼らとオンラインで対話をする事で、繋がりを感している。

順さんも高齢で亡くなりオンラインの仕事も失った未名子は、資料館の膨大な沖縄の歴史を機器に収め、自宅に持ち帰る。

ある日、台風に乗じて一人暮らしの未名子の家に迷って来たのか、宮古馬が跪いているのを発見する。直ぐ届け出たが、未名子はきっとそれが順さんの姿と重なったのだろう。引き取って飼い始める。その馬の置場所がガマと出てくるから驚く。沖縄にとってガマとは戦争で住

民の最後の避難場所となり、又祈りや葬送の場所でもあり、戦中では防空壕や野戦病院ともなり、沖縄の人々にとっては、とても大切な聖なる場所だ。其処に未名子は、迷いこんだ宮古馬を繋ぎ止める。相応しいと確信する未名子がいる。

しかも驚くことに、人付き合いの苦手な未名子が宮古馬に[ヒコーキ]と名付けて街中を闊歩する姿がある。順さんと共に[ヒコーキ]を携えて、歴史を伝え遺していくことを行動に移していくのだろう。

我々の存在は、一滴の水の例えとして、先月の課題本で学んだ。広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の一滴に過ぎないが、しかしその一滴の雨水なりの思いがあると。順さんも未名子も無名の小さな存在だが、沖縄の歴史を消滅させない、伝えてゆかねばという二人の強い意思が光っている。

◆【 TK 】

今回の小説はどれもファンタジーのようです。そして芥川賞の受賞作です。

個性的な作品で少し分からないところがあってもそうなんだとわりきることになりました。

主人公の女の子は独り身で親もいないようす。夕食も適当に買い物をしてお腹を満たしている。そして沖縄の地方の資料館を手伝いをしている。そして不思議なインターネットでのクイズのアプリみたいな仕事をしている。

ゲーム相手は深海とかシェルターにいる人でした。

昔石垣島の人と文通をしたことがあります。手紙を書いて届くのは一週間後。しかしこの小説ではカメラ付きでお互いにお話ができている。どんなに遠くにいても話ができ、お互いに孤独に感じることもなさそうです。

沖縄の馬も突然でてきてペットになっている。

私はどうもこの小説は地元のひとがこの馬に触れることによって主人公の資料館のお手伝いのことに理解が生まれたと感じました。

私は資料館とクイズアプリの人達、馬それぞれのモチーフのつながりとか意味をとらえられませんでした。

印象的な文章は (原文ママ)

人間は怖いもの、不安を感じるものに、近づいて知りたがる傾向があるというような内容でした。知識や資料を整理して人々に役立つものとして残す使命を主人公は果たしたいのだと結論づけしました。

◆【 佐村 蘭子 】

『首里の馬』という表題から連想したのが、琉球王朝から沖縄に関わった内容でした。そして、『スーホの白い馬』のような感動する内容だったらいいなと思って読み始めました。

しかし、一風変わった仕事とどうして馬(宮古馬)が出てくるのかわからない展開になり、読んでいても状況がイメージとして広がらずよくわからない本でした。もう少し、読解力をつけたいです。

◆【 T 】

孤独って何だろう？人と繋がるって何だろう？と考えさせられた。

順が営む「沖縄及島嶼資料館」で働く未名子は、一緒に暮らす家族がいなくて孤独であった。一人暮らし、友達も出てこない、同僚もいなくて一人で淡々と仕事をこなす日々・・・彼女は本当に孤独なのか？そして、孤独だから不幸なのか？孤独を調べてみると、

「孤独とは、精神的なよりどころとなる人や、心の通じあう人などがなく、さびしいこと。たとえば、物理的には大勢の人々に囲まれていても、自分の心情が周囲の人から理解されていない、と感じているならば、それは孤独である。当人が、周囲の人たちとは心が通じ合っていないということに気付いていれば孤独である。たとえ周囲の人々の側が、その人と交流があると勝手に思っている、当人が、実際には自分が全然理解されていないと気付いていれば孤独である。」(ウィキペディア)とある。

10年近く順の資料館で働き、順が集めた様々な資料を整理し保存・管理する中で未名子は、順と心が通じ合っていたのではないだろうか？そして、この資料を守っていかなくてはいけないという強い気持ちが湧いてきたのではないか？自分と気持ちを同じにする人と出会い、自分のやるべきことを見つけ、データとして残すために奔走した未名子は、一人ではあるが孤独ではないし、ましてや、不幸とかいう言葉では考えられない。

また、彼女とクイズのやり取りをする三人の相手。彼らはそれぞれ究極な孤独の中にいるように思われる。もしかすると彼らは、いつもはたくさんの人に囲まれて生きている人たちかもしれない。たくさんの人に囲まれていても心が通じ合っていないと感じているのではなかろうか？大勢の中で感じる孤独は、一人で感じる孤独よりより深く感じると思われる。それは、まるで海の底に一人にいるような。宇宙空間に一人にいるような。戦場のど真ん中のシェルターに一人でもっているような・・・。彼らはそのような孤独を感じているのではないだろうか。

そんな彼らも外部のだれかとの繋がりを求めている。未名子との交流は、細くて時々途切れがちになるが、とても大切な繋がりなんだろうと思う。未名子も彼らに自分の大切なデータを託したということは、彼らと心が通じ合うところがあったのだと思う。

◆【 N2 】

全編流れの静かな本でした。はじめは普通の暮らしが描かれているのですが、宮古馬が登場したあたりから、フィクションのようにも思えますが現実のようにも思えます。作中には時空を越えた多くのことが詰め込まれており、もっと詳しく知りたいと興味をかき立てられました。クイズに登場する三人はそれぞれが望んだ一人居で、それが自身にとって居心地の良い世界なのは資料館の資料の整理や、クイズ出題の仕事に安心感を覚える未名子の有り様と共通しています。資料館の資料の整理や、クイズ出題の仕事はとても面白そうでした。最後のクイズは what3words というものから出題されているようで、このような位置決定方法があると

いうことを初めて知りました。

作中にいろいろな機器が出てくるのですが、本当に時代の早さを感じます。沖縄の一つのビルディングから宇宙へも、海底へも、戦場のシェルターへも通信が出来、SD カードの資料を送信して保存も出来、誰でも中身を自由に目にする事が出来るようです。全てが破壊され元の形が解らなくなってもこの SD カードの資料が復元する時の手助けとなるようです。未来に必要となるかもしれない現在まで集めたデータが、宇宙と海底と戦場のシェルターと宮古馬の背に揺られて川沿いに行く未名子の背中のリュックに保存されているのが面白いのですが、電気店の外に晒されていたカセットテープが現在使われることが稀なのを考えると、果たして未来に必要となったときにこの SD カードから再現することが可能だろうかという疑問もありそれもまた興味深いと思いました。

◆【 K子 】

梶摺りました。題名から想像して「首里」ときたら舞台は沖縄だナ。馬(?)作者の高山羽根子さんは(ペンネーム・実名は?)初めての作者・作品です。読書会の当日、今月担当の会員から作者についての資料をいただきました。SF 作家だそうです。早く知っていれば読むのに苦労しなかったのに…。作品は芥川賞受賞作(2020 年第 163 回)なので中編、文章も構成もあまり複雑ではなく流れていきました。でも馬が出てきません。待っているとやっと登場。宮古馬(日本古来の馬)名前は「ヒューキ」これが突然主人公(未知子)の家の庭にうずくまって居るのです。主人公と馬の交流が始まります。(これが又飛んでる羽根子です)ファンタジー。未知子さんは(独居)孤独かも知れないが自由である。馬は彼女の行動を起こさせる象徴かもしれない。

首里=琉球王朝の歴史(現在の沖縄ではない)

登場人物も少数なのに、高山羽根子さんは私に何を言いたかったのか、うまく理解出来ませんでした。先生から「小説は結局をさがさなくてもいいですよ」と…。

頭がスッキリ!

◆【 望月悦子 】

著者は、美大の日本画卒業の小説家・SF 作家だからか、文章が丁寧で具体的だから映像による想像力をかきたてられます。が主張が見えにくい。読みはじめは、不登校の孤独・孤立についての内容かと。ならば沖縄でなくてもいいのでは。何故沖縄なのか、不登校・沖縄郷土美術館、宮古馬等疑問符が多く、さらにややこしくなるのは SF 的な宇宙・海底・戦場などが出てきます。益々難しくなりました。辛抱強く付き合っていくうちに「知識」「情報」「記憶」の単語がしきりにさりげなく出てきます。この3つの言葉がキーワードと考えると、「沖縄郷土資料館」「遠距離クイズ」「沖縄」「宮古馬」は、何かを象徴・暗示しているのではと考えると納得ができ、そのあたりを読み解いていくと著者のメッセージが理解できるのではないかと思います。

「沖縄」は歴史的に侵略や戦争、飢餓や台風などが人為や自然によってくり返し破壊され

てきています。従って「沖縄」は「破壊と変化」の象徴とするならば、沖縄でなければならないことが理解できました。民俗学者だった順さんは、ガラクタのように見える物を整理し管理しながら「沖縄郷土資料館」を保存しています。この資料館こそ沖縄の実態を記憶し知識として後世に伝える情報であるのだと思います。

「人骨は資料館の近くで採集されたものだった。(P13)この小さな塊がどういう理由で自分の手に渡ってきたのか丁寧に話して聞かせてくれた。順さんの物語なくして何の役にも立たない物体でしかなかった。紙にまとめられた情報群にしても数値やその集合がどういう意味を持っているのか、約束事を聞いて紐づけなければただのインクの模様でしかない。(P14)」と資料としての知識と情報と記録の重要さを感じます。更に「順さんの集めた資料を見ることで、自分の周りにいる人たちや人の作った全のものが、ずっと先に生きる新しい人たちの足もとのほんのひと欠片になることもあるのだと思えたら、自分は案外人間というものが好きなのかもしれないと考えることが出来る。(P15)」人間関係も生み出す3つのキーワード(知識・情報・記録)の重要性が感じられます。このキーワードは「役に立つかどうかなんて今は分からない。(中略)この資料が誰かの困難を救うかもしれない(P157)」これも著者のメッセージの一つかもしれません。政治家がよく「記録にございません」とか資料を黒く塗ったり破棄したりしますが、これでは同じ過ちを繰り返すし、後世には参考にはならないと言えます。3人の解答者ヴァンダの宇宙空間、ポーラの深海空間、ギバンの戦場空間の共通点は「孤独」。これを癒してくれるのがクイズ・知識として「孤独な業務従事者への定期的な通信による精神的ケアと知性の共有」が設定され、その特色を「早く答える必要がない、ようは競争をしない一対一のクイズには、対話があり、心の交流が生まれます。そこにあまり作為はありません」(P41)と特徴付け「クイズの正解数や内容により、通信相手の精神や知性の安定を確認する目的でこのサービスを利用するのだという」(P42)」と位置づけがされています。現在の物質優先・効率・競争を求めすぎる時代の負の部分の癒し・ケアが感じられ、これも著者のメッセージの一つではないかと思います。ギバノは「戦場、ど真ん中、しかし世界一安全な場所」から通信していますが、生き物と哲学に特化し、特に動物と人間にまつわる世界中の文化的な周辺知識、事実や図鑑にはないような生きた知識をもっています。彼は豊かな一族の中で自由に勉強ができたようで、しかしそれも勝つための勉強であったと。強いか弱いか力を持っているかいないかが全てという環境の中で育ち、生まれた時から戦場の人間だった。自分の国を悲しい場所と考えて、戦場とは離れたところで暮らして仕事をはじめた。という。「シェルターは人を守る隠れ家で、同時に祈りの場所であるらしい。ポーラは、わりに豊かな国で財力ある一族の中で生活していたが、自分を卑屈で嫉妬深くて慈悲の心、優しさみたいなものを持っていないと自己分析し、ひとりぼっちでいろいろな場所に移動し旅立つことを福音だとさえ思っている。持ち得る者は強者で、その覚悟が一族の中で自分だけが備わっていないため、家族から逃げ出すことばかり考えています。ヴァンダは決して物質的に恵まれた国に誕生したのではなく、その国の人が幸せを感じているのは国家が何よりも知識や教育を重んじている環境で生活したようです。

3人の共通点は「孤独」ですが、育った環境から現在の「チベット」「ウクライナ」「ロシア」「中央アジア」「中国」「日本」「アメリカ」等に起こっていることに通じる内容と重なって考えてしまいます。これもまた空間として「宇宙」「戦場」「深海」が象徴した著者の意図・メッセージなの

ではと。SF 作家らしく、過去に起こった特に戦後の負の世界をベースに想像と現実と絡ませて怒りを皮肉っていることがよく理解できます。

琉球競馬は速さではなく美しさを競う地産の小柄な馬で、琉球王朝の士族の嗜みから始まったようです。戦後この馬の衰退していく経過は「島民の生活」「ソテツ地獄」「海外へ移民」等から把握できます。「事実として記録し続けていけば、やがてどこかで補助線が引かれ、関係ない要素同士であっても思いがけぬふうに繋がっていくのかもしれない。記録された情報はいつか命を守るかもしれないから(P122)」ここにも著者の意図が窺えます。

著者は、物質的豊かさばかりを追求する大国への怒り、皮肉を示唆し、急激な変化の中で失われていく世界を「沖縄郷土資料館」「遠距離クイズ」「沖縄」「宮古馬」を象徴化して精神的な豊かさを希求しているのではないのでしょうか。未名子はギバノの知識を借りてヒコーキを乗りこなしています。「馬という生き物は移動するために進化するものだから、自分が今居る場所になんらかの力が加わって変化が起きることを、非常に恐れるのだということ(P157)」宮古馬を通して、不必要な軽薄な変化に振り回されることを皮肉っているようにも思います。「知識は人間の精神を豊かにする」これが『首里の馬』から読み解くことができたテーマのように思いました。大きな賞をいただいた作品だけに、たった一つのテーマを広範囲から考え構成された読み応えのある作品だったと思います。

◆ 【 MM 】

今月の課題本は芥川賞受賞作だ。読みやすいが、内容は雲をつかむようで作者が伝えたかったことはよくわからなかった。理解しにくかった原因は歴史、主人公の背景、ぽっと出てくる馬などいろいろな要素が盛り込まれすぎているのではないか、という話が読書会で出た。今月は「よくわからなかった」人が多かったので、この作品を楽しめた人の意見が聞けたらさらに理解できたらうなあ、と感じた。

私を感じたのは「会ったこともない仕事で知り合った人との間でもなにかを共有することでつながりを感じることができるのではないか」ということだ。未名子と彼、彼女たちが知り合ったきっかけはインターネットを使ってクイズを出し、答えるという奇妙な仕事がきっかけだったが空き時間にした会話などから彼らがどんな人なのかは少し伝わってきた。順さんが亡くなって資料館が壊されようとするとき、資料のデータを彼らに託すことで今まで時間をかけて積み上げてきた資料が無いものになることは避けることができた。会うことはなくてもデータがどこかにある、必要になるときはあるかないかもわからない、ないかもしれないだろう、けど取り出すことはできる。未名子たった一人で守っているのではない、ほかに共有している人がどこかにいるのだ、という安心感を感じた。

『首里の馬』は沖縄の話なので戦時中のことも描かれていたが私には強くは響いてこなかった。取り上げるならもっとがつつり向き合ってほしかった。いろいろあるエピソードの一つとして扱うには大きすぎるし失礼すぎるのではないかと思った。

順さんが時間をかけて集めた郷土の資料を整理する未名子。(順さんが分類している)ルールに従って整理し、必要があれば更新もしていく。順さんは今は年老いてしまって資料館に座っているのがやっつだ。未名子は子供の頃からこの資料館に通い、今は管理を手伝っ

ている。順さんの娘、途さんはこの資料館にはノータッチだ。

いろいろなものを集めて何になるの？と思うかもしれないが、新聞の切り抜きでもパンフレットでも数を集めて時間もかければ立派な資料になる。その資料を生かすのは決まったルールで整理すること。見やすく、必要なものを取り出しやすくすること。未名子は仕事でなくてもそれを淡々とこなす。もったいないのは資料の価値を理解できず継承する人がいないことだ。

物語の中でも順さんの死後資料館は取り壊された。未名子は膨大な資料をデータにまとめ、仕事で知り合った世界中に散らばる数人の人に託した。資料を現物のまま残せないのは本当にもったいないが、データが残ったのはせめてもの救いだ。そのデータは利用されたりすることはないかもしれない。でも必要があれば取り出すことはできる。だれでもアクセスできる場所にある。未名子はできることはやったのだ、という気持ちになった。